

第十一回 しませ 島清ジュニア文芸賞 受賞作品

『奨励賞』

【高校生小説の部】

ぼくらの夏を追いかけて

小松高等学校二年 木村 歩 あゆみ

「圭太！いつまで寝てるの！学校遅刻するわよ！」

母の怒声と共に、ぼくは家を飛び出した。

ガシャンと、自転車を荒々しく門の外に出し、助走をつけて飛び乗った。

ぼくの家の何軒か隣のおばさんは、毎日この時間に外へ出て花へ水やりをしている。当然学校へと急ぐぼくの姿なんて見慣れているわけです。そんなおばさんからの生温かい目にももう慣れてきた七月。高校受験を終えて、無事に入学することのできたこの高校に、毎日遅刻すれずれで登校する生活にも慣れてきた。ただ、高校は坂の上に建っていて、毎日この急な坂を、自転車で、しかも重い荷物をかごに乗せて登ることには未だに慣れないけれど。

ああ、坂の上から朝礼を告げるチャイムが聞こえる……。

「坂井」

「はい」

「相馬」

「はいっ」

「田村……田村圭太はまた遅刻か？」

「はい！ここです！」

クラスメイトの視線が、突然開いた扉、つまりぼくへと向けられた。しかしそれももう日常茶飯のことである。

「圭太ー今日はいつもより早いじゃん！」

「だろ？超頑張ったんだ」

「田村、いいから早く席に着け」

友達の冗談と、クラスメイトの笑い声で教室が和やかになると、一日の始まりを感じる。ぼくが席に着くと、先生が出席の続きを始めた。

「なあ圭太！ちよつと聞いてくれよ！」

睡魔と闘い、敗北してしまった数学の時間が終わり、ようやく待ちに待った昼休みである。さあ食べようとお弁当を広げた時、友達の光輝がやってきた。光輝はぼくの前の席に座り、嬉しそうに話した。

「俺さ、今朝すごくかわいい子見ちゃったんだ！」

「へえー」

「なんだよ反応薄いなあ。俺電車通学だろ？今日部活の朝練で、いつもより早い電車に乗ったんだ。そうしたらその子が居てさあ、俺これなら毎日早起きできるかもしれねえ」

話半分にぼくは弁当をむさぼる。朝ご飯をろくに食べていないから、すぐお腹がすいているのだ。あ、このから揚げおいしい。

「しかもその女の子、星華女子高の子なんだよ！頭もいいんだな……つて、圭太どうしたんだよ、急に興味持ちだして」

「え、あ、なんでもない」

「星華女子高」と聞いて、手が止まってしまっていた。

星華女子高と言えば、奈緒が行った高校だ。

奈緒というのは、ぼくの幼なじみだ。将来は医者になりたいと言って、その夢のために進学校の星華女子高へ行ったのだ。毎日朝早く電車で通学している、って言っていたっけ。

そしてもう一人、ぼくには砂月という幼なじみがいる。砂月もぼくと違って頭がよかったから、星華女子高より少し遠い進学校へ行ってしまった。

自転車で十分の近い高校に通っているぼくと違って、二人は電車ですえ遠い高校だから、朝早く出かけている。だから、最近会う機会が全くと言っていいほど、ない。

もう少しで、高校生になって初めての夏休みが始まる。

去年は二人に無理やり付き合わされて、ラジオ体操に通った。高校生になった今年も、二人は、小学生に交じってラジオ体操に行くのだろうか。

「ただいまー」

玄関の扉を開けると、濡れた手をエプロンで拭きながら母さんが台所から出てきた。

「お帰りなさい、今日も遅かったわね」

遅かったと言っても、時間はまだ七時。外はまだ明るい。

「それよりお腹減った！もうご飯？」

「もう少しよ。圭太、その間に着替えちゃいなさい」

「ふあーい」

やる気のない返事をして、階段を上がって部屋へと向かう。部屋に入り、大きくて重い、白のエナメルバッグをドスンと床に置いた。こんなに重いものを担いでいたら、いずれ肩が外れるんじゃないかと思えてくる。タンスの中からもいつも履いているジャージを取り出した時、ぼくの部屋の扉がノックされた。

「圭太、入るわよ」

「いいよー」

母さんは控え目に扉を開けて、ぼくの部屋に入った。

「もうすぐで夏休みよね。今年はラジオ体操とか行かないの？」

母さんは、どこかそわそわしていて、嬉しそう、というか楽しそうだった。

「行かないよ。行くわけじゃないじゃん」

「どうしていかないの!?今年も三人で行けばいいじゃない!」

「……奈緒と砂月、今年も行くの？」

「え、知らないわよ？」

一瞬の沈黙が流れた。母さんは、ぼくに一体何をさせたいのだ。

「二人が行かないならばぼくも行かないよ」

「今年は圭太から誘えばいいじゃない」

圭太は二人の携帯の番号とか知ってるんでしょ、と母さんは言った。

「もし二人が行ってもぼくは行かないよ」

「どうして?行けばいいじゃない」

「行かないってば!もう着替えるから出てってよ!」

持っていたジャージをベッドの上に放って、ぼくは母さんの背中をぐいぐい押して、部屋の外へ出した。乱暴に閉められた扉のむこうで、少し呆れた母さんの顔が目に見えかぶ。

二人の携帯の番号も、アドレスも、もちろん知っている。

ぼくも、高校生になるからという理由で携帯電話を買ってもらった大勢のうちの一人だ。それは奈緒も砂月も同じだった。お互い携帯電話を買ったら最初にアドレスを交換しよう!という奈緒の提案で、ぼくは最初に二人とアドレスを交換したんだから……。

でも、徐々にメールもしなくなった。

今までは同じ中学だったから自然と顔を合わせていたのに、今では、通う学校も、通学手段も全然変わってしまった。

会わなくなったら、メールはしにくいのだ。

二つ折りの携帯電話をそっと開いて、アドレス帳を開いた。

「奈緒、ゼロキュウゼロ、ヨンロク……。砂月、ゼロキュウゼロ……」
知っているに決まっているじゃないか。

ぼくたちは幼なじみなんだ。

ぼくは携帯をパタンと閉じて、ベッドに放り出してリビングへ向かった。

外は、もう暗い。

土曜日の朝。閉まっているカーテンの向こうには、夏の太陽が出ているのがわかる。

あまりにも暑くて目が覚めた。目の前の目覚まし時計を見ると、今は九時だった。いつもの土曜日ならまだぐっすり寝ている時間だ。

寝るときにかけていたタオルケットもいつの間にか足元へと追いやられていて、体中がベタベタする。今すぐシャワーを浴びたい。

「圭太ーそろそろ起きたらー？」

「……ん、起きてるよ」

部屋の扉の向こうで母さんの声がした。多分階段の下から叫んだのだろう。今ちようど起きたところだ。グッドタイミングなのか、バッドタイミングなのか。

体を起こし、ぼさぼさになった髪をかきあげた。まだ完全に覚醒しない頭の端で、家のインターホンが聞こえた気がした。

「圭太ー！」

母さんが、またぼくを呼んでいる。

「だから……起きてるってば！」

「そうじゃなくて、お客さんよー！」

「はあ？」

今日、友達と何か約束してた……？いや、してない。じゃあ、突撃訪

問？いや、ぼくの高校の友達にはぼくの家を知らないはずだ。じゃあもしかして、かわいい女の子が告白しに来た、とか……？

起きたばかりでうまく回らない頭で必死に考えるが、思い当たる節がない。とにかく、玄関に「お客さん」を迎えに行こう。百聞は一見に如かず、だ。あれ？ちよつと違う？

心のどこかで、告白しに来た女の子ならいいな、なんて馬鹿なことを期待しながら玄関へ向かうと、そこに居たのは少し懐かしい顔。

「よー！」

「え、砂月!？」

「久しぶりだよなー、圭太と会うの。と言っても、五月に会ってるから、二ヶ月しか経ってないか」

今日も最高気温が三十度を超える、暑い日になるらしい。

そんな中ぼくらは今、家から歩いて十分の公園にいる。午前中でもすごく暑い。体が溶けそうだ。

Tシャツをパタパタさせて、服の中に風を送る。汗で濡れた体に一瞬の涼しさを感じるが、すぐに周りの温度に負けて体の中が暑くなるのを感じた。少しでも体を動かすと、汗が止まらない。

涼しくなるために腕を動かす。すると体を動かしたことにより体温が上がる。汗をかく。なんて悪循環。

Tシャツがどんどん汗で色が変わっていく。これ、お気に入りのTシャツだったのに。着てこない方がよかったかな。というか、砂月が外に出ようなんて言い出さなきゃよかったんだ。

ぼくはほんの十五分前のやりとりを思い出し、そしてうらめしく思った。

「よ、圭太、久しぶり」

「ひ、久しぶり。どうしたんだよ急に」

「実はさ、今度あのバンドのライブあるんだよ。ほら、圭太と奈緒も好きだって言ってたバンド。それで、チケット取れそうだから、一緒にどうかなーって思ってる」

え、あのバンドのライブ！

一瞬で目の色が変わったのが自分でも分かった。きっとぼくの目は昔の少女漫画のようにキラキラしていることだろう。

「行きたい！……でも、それならメールで言ってくればよかったんじゃない」

「ま、そうなんだけども、野菜のおすそ分けもあったからさ、口で言っちゃおうと思ってる。それに、ついでに圭太の様子も見に来た」

「砂月はぼくの何なんだよ」

「冗談だって」

砂月はぼくのお父さん？お兄ちゃん？それとも隣のおじさん？両手をあげてそう言うぼくに、砂月は笑いながらそう言った。

「俺はお前の幼なじみ、だろ」

ああ、そうだよな。

「それより、外出て話さないか？『今から家に行く』っていう俺のメール見てないってことは、どうせまた寝てたんだろ？外出れば一発で目、覚めるぞ」

「砂月が来た時点でぼっちり目は覚めてるよ。でもいいよ。久しぶりにぼくも話したいし。着替えてくるからちよつと待ってる」

階段を駆け上がり、部屋に飛び込み、素早く半ズボンのジャージにはき替えた。上は何着ようかな……。目についたのは黒のTシャツ。去年買ったもらったもので、お気に入りTシャツの一つだ。

出してから、砂月の姿が浮かんた。

砂月が来ていたのは青色のTシャツ。砂月のすべての服を把握しているわけではないけれど、見たことないものだった。新しい服、かな。

ぼくは持っていた黒のTシャツを床に放り投げ、最近買ってもらった

白のTシャツを引っ張り出したのだった。

「あー暑い！」

「な？一瞬で目も覚める暑さ」

一瞬で目が覚めるっていうのはそういう意味だったんだな。

「砂月、そのライブって奈緒も誘ったの？」

「まだ。一応誘おうと思ってる。三人で行こうよ」

三人で集まれると思うと、なんだかこそばゆい気持ちがあった。春休み、ぼくの部屋でだらだらと過ごしたあの日以来だ。奈緒と砂月は高校から出た課題をしていて、ぼくは漫画を読んでいたあの日。特別なことなどしていない、何でもない一日だったけれど、あの日が今のぼくらの最後の記憶。

「……なあ砂月。恥ずかしいけどぼくさ、『幼なじみ』って、もつとこう……特別なものだと思ってた」

太陽が強く照りつける。太陽を遮る雲さへぎなんてない。空の低いところに、大きな入道雲ができていた。蝉はせわしなく鳴いていて、遠くでかすかに子どもたちの笑い声が聞こえる。

ぼくも小学生の時は午前中から三人で遊んでいたんだ。土曜日も日曜日も遊んでいたし、夏休みなんてもう毎日のように遊んでいた。朝、ラジオ体操のために早起きが苦手なぼくを二人が起こしに来てくれた。でもぼくがなかなか起きないから、いつも三人で朝から猛ダッシュだ。朝ご飯を食べて、テレビをぼーつと見ていたら奈緒が、プールに行くのよ！って呼びに来て……。毎年の恒例だった。

中学生になり、お互い別の友達ができたし、奈緒も砂月も塾が忙しくなって、集まる機会がめっきり減った。でも中学三年生のとき、同じクラスになった。また集まりだしたぼくからも、高校生になってからはお互いの顔すら見えなくなった。

『幼なじみ』って、不思議な力があるって、本気で信じてたんだ……」
砂月は黙ってぼくの話聞いていた。

公園のベンチに二人で座って、夏休みが近いこの時期にしんみりとした空気を出すぼくらは、周りにはどのような見えるのだろうか。

「俺もさ、そう思うよ」

「えっ」

てっきりぼくは、からかわれると思っていた。圭太、子どもっぽいぞ、って笑われると思っていた。砂月は笑っているけれど、それは意地悪そう顔じゃなくて、優しい顔だ。

「だって、ほら」

砂月はゆっくり、公園の入り口の方を指さした。その指の先を追うと、そこには、自転車にまたがったままぼくらの方をじっと見つめる女の子。

「え、あれって……奈緒？」

「もう！なんで二人だけで会ってるの！私も誘ってくればいいのに！」

「俺らも別に約束して会ったわけじゃないんだって」

砂月に文句を言っている奈緒。その奈緒をなだめるような砂月。そんな二人を見て、思わず笑みがこみ上げてくる。高校の友達と一緒に居る時とは違う、安心感がある。

「なに笑ってるのよ」

「なに笑ってるんだよ」

二人の言葉が重なって、一瞬の間。そして笑い声は一人分から三人分になった。

どうやら奈緒は、学校に忘れてきた課題を取りに行ってきた帰りだったそう。

「だから制服なんだ」

「そうなの！学校まで遠いからすごく大変なの！でも月曜日に提出の課

題だから取りに行かないわけにはいかななくて……」

奈緒は、頭も良いし、しっかりしているけれど、少しドジをするときがある。ぼくなんかには比べたらごくまれに、だけれど。

「そうだ！ねえ砂月、数学って今どこまで進んだ？実は、この課題教えてほしいんだけど」

「どこ？あ、これならもう習ったから少しなら教えられると思うよ」

「ぼくも奈緒の課題の問題を少し見た。」

「うわ、なんだこれ。」

数学の問題のはずなのに、アルファベットや見たことのない記号が並んでいる。これは数学？

二人ともやっぱり、ぼくとは違うな。頭がいい。そんなの小学生の時から分かっていただけで、学年が上がれば上がるほど、その差は広がっていくばかり。

「ねえ圭太！」

「何？」

「今日圭太の家で課題してもいい？」

「あ、午後はぼく部活あるから、ちよつと……明日なら大丈夫なんだけど」

「そうなの？じゃあ明日行きたいな。砂月は明日大丈夫？」

「俺は大丈夫だよ」

「じゃあ明日圭太の家に集合！」

決まりね、と笑う奈緒の顔がキラキラ輝いていたのは、夏の太陽のせいだったのか、それとも、ぼくと、同じ気持ちだったのか。

「じゃあ、ぼくそろそろ帰るよ。部活の準備しないといけないから」

「そういえば、圭太の部活って……」

「帰る！じゃあね！」

奈緒の言いたいことが何となくわかったぼくは、そそくさと逃げるように公園の出口へと向かった。

遠くで、砂月が奈緒に何のこと？と聞いている。

「ああ！圭太が入った部活のことか！」

「まだ違和感があるんだよね、だって、まさか圭太が……」

ラグビー部に入るなんて！

また二人で声を合わせてそう言った。ぼくに聞こえるように、大きな声で。

ぼくだって、高校生になってまさかラグビー部に入るなんて思ってもみなかったさ。中学生の時も部活に入らず、毎日だらだら過ごしていたこのぼくが、あの激しい男のスポーツの代表と言っても過言ではないラグビーを始めることになるなんて、誰が予想しただろうか。

でも、部活動見学の時のラグビー部の第一印象は強烈だった。似合うか似合わないかなんて関係なく、ぼくはここに入りた、本当にそう思ったんだ。

「馬鹿にしていればいいよ！いつか男らしくなって二人を見返してやる！」

ぼくは未だに笑い続ける二人に向かって叫んだ。負け犬の遠吠えのようだったけれど……ってあれ？またちよつと違ったかな。

今日は、珍しくいつもより早く目が覚めた。規則正しい生活をしている周りの友達に比べたら決して早くはない八時半。

「あら圭太、今日は早いね。何かあったの？」

母さんは、ぼくがこんな時間に、自分から起きてきたことにとっても驚いた様子だった。

昨日は部活から帰ってきたのが六時。それからお風呂に入り、ご飯を食べてからすぐに寝てしまったぼく。疲れていたみたいだったから、今日はいつもより遅く起きてくると思ってた、と母さんは笑った。

「別に。ただ、暑くて目が覚めただけ」

正直、ぼくも疲れで午前中はずっと寝ることになってしまった。昨

日寝るときに、明日は暑さにも負けずぐっすり寝ていると思ったけれど、急に目が覚めたのだ。暑くて目が覚めた、というのもも本当だけれど、どちらかという、遠足などのイベントがある日はなぜか自然と目が覚めるあれだ。

今日は、一時から奈緒と砂月が来る。ぼくは午前中ずっと寝ているだろうから、という二人の配慮からだ。

「あー暑い」

思っていたよりも早く起きてしまったからやるのがない。二人が来るまで何をしようか。こんなに早く起きることになるなら、午前中から集まることにしておけばよかったかな。

基本的にベッドが好きなのは、ベッドでゴロゴロしながら、とりあえず昼ごはんまでの三時間をどのように過ごすか考えた。

そういうえば、夏休みの課題、この前発表されたな。まだ夏休みに入っていないけれど、早めに始めたい人のために、ということ、国語も、英語も、数学も、全ての教科で課題の範囲が発表された。でも、課題を早くから始める人なんているのだろうか。いや、いるだろうけれど、ぼくには考えられない。ぼくは夏休みの宿題は夏休みにやるものだ！と主張している。まあ、ただ問題を先延ばしにしたいだけなのだが。ちなみに、言わずもななかもしれないが、ぼくは夏休みの最終日には宿題終わらないと嘆いている人間の一人だ。

やることないし、やろうかな。そう思って寝ていた体を起こした時だった。

「圭太ー！」

母さんが、階段の下からぼくの事を呼んだ。昨日の光景となんだかかぶる。

「何ー！？」

「お客さんよー！」

また？これも、昨日と同じだった。だとすれば、母さんの言う「お客

さん」と言うのは、今日もまた砂月のことだろうか。いや、今日こそかわいい女の子が……。

「やっほー！暇だったから来ちゃった」

かわいい女の子、と言えはそうかもしれない。

そこに居たのは、ぼくに告白しに来たかわいい女の子ではなくて、奈緒だった。

「寝てたら帰るつもりだったんだけど、まさかこんなに早く圭太が起きてるなんてね」

「……こんなに早くって、もう九時だけど」

「圭太にしたら十分早いでしょ」

「……おっしやる通りで。」

奈緒はぼくが起きていることを確認してから、おじやましますと言って、まっすぐぼくの部屋へと入っていった。ぼくも慌てて追いかけた。

「今砂月にメールしたら、今から来るって」

「あ、そう」

ぼくの部屋なのに、奈緒はぼくよりもくつろいでいるように見える。

ぼくは部屋の扉の近くで未だ立ったまま、奈緒が携帯電話をいじっているのを眺めている。でも奈緒は、ぼくの部屋の床に座って、鼻歌を歌いながら携帯電話の画面を眺めているのだ。

「おじやまします」

「おじやまします」

ぼくの背中で部屋の扉の開く音がした。

「あ、砂月来た」

「ちはー」

……まったく、この二人は、勝手にぼくの部屋に入ることに慣れすぎている。母さんも、今ではぼくに何も言わずに二人を部屋に通すようになってる。

「さ、勉強始めましょうか」

奈緒は部屋の四角いテーブルの上に、昨日見せてくれた数学と思われる

冊子を広げだした。それを見た砂月もまだ立ったままのぼくを通り過ぎて、奈緒の向かいに座った。

もう勉強を始めるのか……。ま、今日はそのために集まったんだから仕方ない。

みんな集まったことだし、クーラーをつけよう。普段は午前中はクーラー禁止令が出ているが、二人が居るし、それに勉強するならつけても文句は言われないうらう。

ぼくも今日は数学をしようかな。分からないところはどっちに聞いても答えてくれそう。ぼくが今やっている範囲なんて、この二人はとっくの昔に終わっているだろうし。

「砂月、この問題分かる？」

「あ、これはこの公式を使うんだよ」

クーラーの風の音だけが響く静かな空間の中、時々行われる会話は勉強の質問だけ。ぼくはその度に二人の会話に耳を傾けるが、さっぱりわからない。

「なるほど！やっぱり砂月は頭いいね。あ、そう言えば、大学どこに行くか決めた？」

「一応、中学の時に言ってたあの大学に行きたいとは思ってる」

え、大学？

ぼくらはまだ高校に入ったばかりだ。ついこの間高校受験が終わったところなのに、もう大学受験の話？大学受験まで、まだ二年もあるのに？

「さすが砂月だね。圭太は？」

「ぼ、ぼく？大学受験なんてまだまだ先じゃん」

「何言ってるの！受験なんてすぐに来ちゃうんだからね！」

「そうさ。志望校は早めに決めた方がいい、って高校の先生も言った」

奈緒はぼくを責め立てるように言っていて、砂月はしみじみと言っていた。そんな二人に返す言葉もなくて、ぼくはひたすら黙って二人の話を聞いていた。

「奈緒は志望校決めた？」

「私、ずっと医者になりたいって言ってたでしょ？だからそっちの方に進みたいとは思ってるの」

「じゃあすごい頑張らないとな」

「うん。砂月の志望校だってレベル高いよね。でも砂月の頭なら大丈夫か」

もう志望校を決めるのって、普通のことなのかな。ぼくの周りの友達には、昨日見たドラマの話とか、偶然見かけたかわいい女の子の話とかそんな話しかしてない。志望校の話なんてしたことなかったから考えたこともなかった。

でももしかして、みんなもう将来の事を考えているかもしれない。ぼくだけかもしれない。将来の事を考えないで面倒なことを後回しにしているのは。

夏休みの宿題みたいに、ギリギリじゃダメなんだ。宿題は終わるかもしれない。でも、ぼくの将来は……。

志望校の話をしていると、ぼくの部屋の扉がノックされた。

「入るわよ」

「何、母さん」

「もうすぐ十二時だし、お昼ご飯にしない？奈緒ちゃんと砂月君の分も用意したわよ」

「わー！ありがとうございます」

「お言葉に甘えて、いただきます」

昼ごはんは、冷やし中華だった。

毎年、夏に二人が家に来た時は冷やし中華と決まっていた。普段あまり冷やし中華なんて出てこないのに、今日に限ってよくあったなあ。

……もしかして、母さんは今日二人が来ることを分かっていたんじゃないだろうか。ぼくは昨日、二人が来ることを母さんに言っていない。でも母さんはぼくの様子を見て気がついたのかもしれない。昨日の部活の時に「圭太、今日はいつもより気合が入ってるな」と先輩に言われた。自分では気がつかなかったけれど、久しぶりに三人で集まれることへの嬉しさが、無意識のうちに顔や行動に出ていたのかもしれない。母さんは、それを見逃さなかったのかな。

「あー疲れた！ぼく六時間も勉強したことないよ！」

「そうなの？私は結構普通かも」

「俺も。まだ明日の予習終わってないから、家帰ってからまだ勉強なきゃ」

やっぱり、二人とは住む世界が違うようだ。

休憩を挟みながらもトータルで六時間の勉強。一日でこんなに勉強なんて、したことがない。テスト前でも頑張ってた五時間だ。

午後六時でも、まだ外は明るい。さすが夏だ。今は夕方と言うよりも、昼のようだ。

「私、そろそろ帰るね」

「じゃあ、俺も」

ふらっと集まってふらっと帰る。これがぼくらのスタイルだ。久々に集まったから、とか、次会えるのはいつか分からないから、とかそんな関係ない。ふらっと帰って、またいつかふらっと集まるんだ。

「うん。今日はありがとう。ぼくもおかげで数学ちよつと分かった」

「いえいえーじゃあまたね」

「おじゃましました」

二人が帰った後、クーラーの電源を消した。ベッドに横になった。耳を澄ますと、外ではしやぎまわっている小学生の声が聞こえる。さらに

耳を澄ますと、ぼくの心臓の音が聞こえる気がした。
とくんとくん。

うずうずしていて、何かしなきゃいけないのに、何をしたらいいのかかららない。

二人は、確実に前に進んでいた。ずっと二人の背中を追いかけていたぼくだけれど、今は背中も見失おうとしているようだった。

置いていかないで。

ぼくは起き上がって勉強机に置いてあった携帯電話を手に取った。

素早くメールを打つ。送信先は、奈緒と、砂月。

「圭太ーご飯よ」

送信完了の画面と同時に、夜ご飯を告げる、母さんの声。携帯電話を机の上に置いて、ぼくは階段を下り、リビングへと向かった。

携帯のアラームが鳴っている。いつもはそれを止めてからもう一度、と布団にもぐるのだが、今日は違った。アラームの音で目がぱっちり開いて、すぐに立ち上がって着替えを始めた。

外はまだ暗い。壁にかかっている時計を見ると、うつすらと短針が四の字を指しているのが見える。

寝ている母さんたちを起こさないように階段を出来るだけ静かに下りて、外へ出た。

爽やかな空気って、こんな空気のことを言うんだろうな。思わず深呼吸をしたくなる。

ラジオ体操も、毎日こんな気持ちで行けたらよかったな。今更ながら、少しだけ後悔した。

ラジオ体操の時のように腕を大袈裟に広げることがはしなかったけれど、肩をあげて、大きく息を吸った。大丈夫。昨日のもやもやはまだ晴れないけれど、少しだけスッキリしている。

向こうから、自転車が向かってくる音がした。二台分の音だ。

その自転車は、近づいてきてぼくの前で止まった。

「奈緒、砂月、おはよう」

「おはようじゃない！何なのいきなり！メールで『朝四時にぼくの家の前に集合』って」

「こんな時間に呼ぶ、ってことは何かあるんだろ？」

「……ちよつと、ついて来てほしいんだ」

そう言っただけでも自分の自転車にまたがり、二人を誘導するように先頭を走った。

いつも二人についてきたぼくが、今は先頭を走っている。二人がちやんと後ろに居るのか不安だったけれど、自転車の音がするから、きつとついて来てくれるのだろう。

朝の四時に呼び出したにも関わらず、文句を言いながらも集まってくるんだから、やっぱり二人はいい奴らだ。

最初はどこに向かうのは戸惑っていた二人も、次第にぼくの向かっている場所が分かってきたようで、道を曲がる時、時折ぼくよりも早くどちらかが曲がっていた。

ぼくが向かっているのは、オレンジ丘だった。正式名称は二星丘。夕日がきれいに見えることからオレンジ丘と呼ばれている。昔はよく夕日を見に来たけれど、今は立ち入り禁止の札がかかっている、入ることはできない。

でもぼくは、そんな立ち入り禁止の看板を無視して、どんどん中へ入っていった。二人も黙ってついて来てくれる。

中学三年生だった去年の夏も、ぼくらはこの場所へ来た。その時も立ち入り禁止の看板を無視して、三人でこの頂上へ続く階段を上っていた。辺りは少しずつ明るくなってきていて、ぼくとしてはグッドタイミングだ。

「ねえ圭太。そろそろここへ来た理由を教えてよ」

オレンジ丘の頂上へ着いた時、奈緒がようやく口を開いた。

空が、どんどん明るくなっていく。

夜明けだ。

「えっと……朝日を、見に来たんだ」

ぼくらが話している間も、空は着実に明るさを増していく。

「あのねえ……夕日がきれいに見える場所から、朝日が綺麗に見えるわけじゃないでしょ！ 正反対の所に太陽があるんだから！」

「まったくだ。奈緒の言うとおりだ。今も、空は群青色から澄んだ水色に変わっていつているのに、朝日は一向にぼくの目の前に現れようとはしない。」

でもぼくは、ここに来たかったんだ。夕日がきれいなこの丘で朝日が見える気がしたんだ。

「何かが見えると思ったんだ」

違う。

何かを、見つけに来たんだ。

「去年の夏、ここで将来の話をした。まあ、あのときは夕方だったけど」

「そうだな。ちょうど去年の今頃だったな」

「それで、あの時から二人にはすでに目標があつて、今もその目標にちゃんと向かつてる」

「……圭太は違うの？」

「ぼくは……ぼくはあの時から何も進展してなくて……でも二人はどんどん進んで行っちゃうから……」

「あのな、圭太」

思わず俯いてしまったぼくに、砂月はゆっくりと近づいてきた。

「お前は気が付いてないかもしれないけど、お前だって前に進んでるだろ？」

「……え」

「そうよ。圭太だって進んでるじゃない。高校生になって、ラグビー始

めたんでしょ？ ちゃんとした変化じゃない」

「何かやらなきゃ、って思ってるんなら、今から始めればいいんだよ」

太陽の光が見えた。

オレンジ丘でも、朝日が見えるんだね。綺麗だねって、二人は太陽を見ながら話している。

ぼくは、太陽と反対方向にある町を見た。夕方には日が当らなくて影になっている所に、今は光が当たっている。夕方とは違う顔だった。

「あ！ そろそろ帰らなきゃ、外に出てたことばれちゃう！」

「俺もだ！ 親を起こさないようにそっと出てきたから、居ないのがばれたらヤバイ！」

「二人は家でも早いし、もう帰ろうか」

二人は慌てて走り出した。

ぼくはやっぱり二人の背中を追うんだな。

でも……

「ねえ！」

二人が同時に振り向いた。

「幼なじみって、やっぱり不思議な力があるよね！」

前を走っている二人に向かって、精一杯叫んだ。奈緒も砂月もニカッと笑って、また前を向いて走り出した。

「どうしたの！ 圭太が六時半に起きてるなんて！」

帰って来てから、自分で焼いたトースト食べながらニュースを見てみると、母さんが起きてきた。

「おはよう。……目が覚めちゃってさ」

「昨日といい、今日といい、あんたどうしちゃったの？ あ、奈緒ちゃんと砂月君に会ったから良い影響を受けたのね。本当に、あの二人にはお世話になってばかりで……」

「うるさいなあ！」

母さんがうるさいから、ぼくは早くに家を出た。いつもは自転車で猛ダッシュをしている道を、今はゆっくり走っている。いつも花に水やりをしているおばさんもまだいない。

朝四時の空気よりも湿気を含んでいて爽やかではないけれど、余裕があるから、いつもはうつとうい向かい風も、今は気持ちいい。

「おはよう……って、まだ誰も居ないよな」

教室の扉を開けて、控え目にあいさつをするも、やはり教室には誰もいなかった。自転車で走っている時も学校の生徒を見なかったから、誰も居ないことは予想していた。ぼくがいつも来る時間よりも一時間も早いしね。

もうすぐ夏休みだ。今年の休みは何をしようかな。あの二人は課題が忙しそうだから、次集まるのはまた勉強会かな。勉強は嫌だけれど、分らない所を教えてもらえるし、それでもいいか。あとはライブだ。あのバンドのライブに、三人で行けるのか。夏休みが待ち遠しい。

誰も居ない教室で一人そんなことを考えていると、教室にクラスメイトが入ってきた。

「おはよう……って！誰かと思ったら圭太かよ！」

「あ、光輝か。おはよう」

「お前どうしちゃったんだよ！なんでこんな時間から居るんだよ！」

そんなに驚かなくてもいいだろ。確かに毎日のように遅刻している奴が誰よりも早く来ていたら驚くかもしれないけれどさ。

「実は、今日からぼくは生まれ変わろうと思って」

「生まれ変わる？圭太が？あははは！」

ケラケラと笑う光輝を放っておいて、ぼくは再び夏休みの予定を練ろう。

夏休みに入る前に二人にメールしようかな。

光輝をちらりと見ると、笑いすぎて目には涙を浮かべていた。そんなに笑うことだったか？

「いやーでも、圭太がこんな時間に来るなんてな」

「……うるさい！」

「今日は雨でも降るんじゃないか？」

カラッと晴れている空を指さして、光輝はまたケラケラ笑い始めた。

雨？

雨なんか降らせるわけがないだろう？

だって今日は、綺麗な朝日、のち、綺麗な夕日、なんだから。

《選評》

さわやかな友情物語で、前向きな気持ちになれる清々しい作品。

物語の中で特に大きな出来事はありませんが、幼なじみの友人二人との関わりを通して、自然に成長していく主人公の姿が描かれています。文章の構成もしっかりしており、作者の書きたい気持ちがあふれ出ていることを感じさせる作品です。